研究所だより

第４８６号
２０２５年　６月１３日
発行：土佐清水市教育研究所
ＴＥＬ　８２－３０１５

“　あめあめ　ふれふれ　かあさんが
　　じゃのめで　おむかえ　うれしいな
　ピッチピッチ　チャップチャップ　ランランラン　”

「 あめふり 」　日本の童謡　　1925（大正14）年

～アジサイの花が色鮮やかに咲いています！～

６月８日（日）気象庁は、「四国地方と九州北部が梅雨入りしたとみられる」と発表しました。四国は平年に比べ３日遅く、昨年より９日早いそうです。同日には沖縄地方の梅雨明けが発表され、本格的な夏の始まりとなりました。

各学校では、プール掃除やプール開きが行われ、本格的に水泳の授業が始まりました。これから暑くなってくると川や海へ行く機会が増えてきます。「自分の命は自分で守る」を合い言葉に水難事故防止に努めていただきたいと思います。

・・・

これからは、子どもたちの大きな多様性の担保を前提にして、建設的に協働学習し合える学級集団の形成が目指されますが、その取組には大きく二つの面があります。

まず必要条件として、児童生徒の情緒の安定や意欲を喚起・維持する側面である「安定度」の確立です。そして、安定度の確立を基盤として、率直で建設的な思考の交流を支える側面である「活性度」の確立が必要なのです。従来の知識習得型の授業では「安定度」の確立がとても重視されてきましたが、探究学習・協働学習が求められる授業では、さらに、高い「活性度」の確立が求められるのです（河村、2022）。

安定度と活性度には段階があり、それをルーブリック表にまとめたのが図１（河村、2025）です。協働学習で建設的な相互作用を生む学級集団の状態としては、「安定度」が⑤安定で、「活性度」が❺創造、❹活用のレベルが期待されます。

安定度		活性度	
⑤安　定	学級の課題に対して、児童生徒全員がリーダーやフォロワーの役割に柔軟につき、役割遂行することができる。	❺創　造	建設的に相互作用でき、既成の知識を発展させて、新たな発想を生み出せる状態。
④固　定	全体行動はできるが、集団主義的な傾向があり、リーダーとフォロワーの役割が固定し、児童生徒の間に序列がある。	❹活　用	建設的に相互作用でき、既成の知識や方法に新たなものを加えて、応用できる状態。
③流　動	児童生徒は集団の構成員であるという意識が乏しく、個人の利益が優先され、集団活動での連携が弱く小集団が乱立し、成果もいま一つである。	❸遂　行	教師から与えられた課題を、指示されたとおりに、全体で集団活動が実行できる状態。
②不安定	児童生徒は集団の構成員であるという意識が乏しく、かつ、学級内に人間関係の軋轢、小集団対立があり、学級集団としてまとまることができない。	❷停　滞	学級内の人間関係は不安定で、教師への抵抗から指示されたことを、素直に実行ができない状態。
①混　沌	児童生徒は集団への所属意識が薄く、嫌悪感があり、各自が勝手に存在し利己的に活動しているので、集団の体をなしていない。	❶不履行	学級内の人間関係が悪く、教師の指示に反発し、指示されたとおりには実行しない、集団活動ができない状態。

図1　安定度と活性度の確立の程度（河村、2025）

さらに、「安定度」と「活性度」の確立度とそのバランスを把握することで、各学級集団の状態の特性の理解が明確になってくるのです。

５　目標と現状の大きな乖離

変化に対処する問題解決能力である資質・能力を児童生徒に育成する授業を展開するため、文部科学省は、仲間だけと「会話」しかできないレベルから、多様な人々と主体的に協働できるように「対話」を活用した授業改善をすべし、と目標を掲げていますが、学校現場の学級内には、「会話」ができる仲間もつくれない児童生徒がとても増えています。3年間の新型コロナ感染予防の自粛政策を経て、この傾向がより顕著になったと思われます。

2023年度の小学生と中学生の不登校は、どちらも11年連続で増加し、不登校の小中学生の数は、合計で30万人を超えています（文部科学省、2024）。その統計では、児童生徒たちが不登校にいたる要因はここ数年固定していて、その過半数が「無気力・不安」です。ただ、「無気力・不安」から不登校にいたる背景には複合的な要因が絡み合っているため、「具体的な原因を特定することは難しい」と文部科学省も指摘しており、学校現場でも不登校の子どもの対応・支援に苦慮しています。

このような傾向の心理的特性を持つ現代の子どもたちは、学校や学級集団を「安心できる場所」だとなかなか感じられないのではないでしょうか。自ら価値観を共有する仲間をつくり「会話」をすることにも難しい面あるのです。協働学習に取り組む前提となる安定度の高い学級集団を形成するにも、とても高い壁があるのです。

不安が高まっている児童生徒は、他者から指摘される改善策のアドバイスを、自分に対する非難・攻撃と受け取ることが多いのです。したがって、協働活動・学習を「やってみよう」と児童生徒に動機づける前に、児童生徒が持つ人間関係に対する不安を軽減させることが必要なのです。この取組は、ゼロからではなく、マイナスからのスタートだと思います。

＝引用文献＝

・河村茂雄（編著）『開かれた協働と学びが加速する教室』図書文化、2022年。
・河村茂雄『ピアフィードバックのゼロ段階』図書文化、2025年。
・文部科学省「令和５年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」2024年。
・Edmondson，A．C.(1999)『職場チームにおける心理的安全性と学習行動』行政科学季刊誌、1999年。
・Lave，J．&　Wenger，E．(1991)(佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加』産業図書、1993年)

＝令和７年度研究協力校（三崎小学校・清水中学校）の紹介＝

今回は、「三崎小学校」の研究テーマ・概要について紹介します。（申請書より）

【三崎小学校】

１．研究テーマ

地域の特色を生かし『地域との連携・協働』による自立をめざした児童の育成

２．研究の概要

土佐清水市教育大綱・振興基本計画Ⅳの２つの基本理念達成に向け、目指す人間像の一つである、「しみず（家族・なかま・ふるさと）を愛し、社会に貢献できる人間」を育成するため、総合的な学習の時間や社会科等の時間を中心としてふるさと学習に取り組み、地域の方との豊かな出会いを通して地域の方のあたたかさや自然を再発見し、児童の自立を目指す。

『目標』

① 地域の人たちとの交流や自然の中での体験活動を通じて、歴史や課題を理解し故郷を愛する心情を育てる。
② 「山・川・海の学習」を通じて地域や文化について学び、理解を深める。
③ 森林の持つ意義と大切さを学び、これからの環境について考える。
④ ジョン万次郎の生涯を知る。

『活動計画』

・校内及び周辺の環境整備（上級生・地域の方々・保護者）
・シュノーケリング体験（サンゴ生態学習）・川の生物調査・間伐体験・グラスボート乗船・ガイド体験等。学校周辺の海・川・山の学習の一環として体験学習をし、地域の豊かな自然と生き物に触れ環境を大切にしようとする学習（意識化）（高）
・潮だまりの観察・貝の学習・海藻の学習・ビーチコーミング・サンゴの学習（中）
・夏休み期間中に各地区会で子どもと大人による川清掃等
・海洋館見学：海洋生物　生態を学習（全）
・田植え（中・高）、稲刈り（中・高）、精米　餅つき大会（全）を通して、食物の恵みや山と川ののつながり等を考える。
・フィールドワーク…ビニールハウス、土佐食、ケンピ工場等地域の工場や施設の見学や石碑の学習
・デイサービスへの訪問。（１年、２年、５年、６年）
・高齢者の方への絵手紙の発送（全）
・こども民生委員活動（３・４年）
・副読本等を活用したジョン万学習の実施（全）

三崎小学校では、研究テーマに「地域の特色を生かし『地域との連携・協働』による自立をめざした児童の育成」を掲げ、活動計画の１つに「田植え、稲刈り、精米、餅つき大会などの体験活動を通して、食物の恵みや山と川のつながり等を考える」と位置付け、全校で取り組んでいます。今年度も４月１８日（金）に３～６年生が田植えにチャレンジしました。地域の方から植え方についての説明のあと全員が田んぼに入り、苗を２～３株つまみ、ぬかるみに足を取られながらも上手に植えていきました。この日は授業で来校していたALTのHadley先生も挑戦しました。コツを掴むととても楽しそうに植えていました。次は夏の収穫です。